

編集後記

今巻は宇都榮子先生の退職記念号である。宇都先生は40余年にわたって専修大学で教鞭をとられた。また、2011年の人間科学部新設のさいには初代人間科学部長として、新しい学部の運営にご尽力をいただいた。この『人間科学論集』も、じつは先生の肝入りがあって成立したものである。私どもスタッフは、日々、先生から教育に対する真摯な姿勢を学ぶ機会に恵まれた。

最終講義で宇都先生は、経済学者アルフレッド・マーシャルの“cool heads but warm hearts”という箴言を引いてご自身の哲学を説明された。このことばは、1885年のケンブリッジ大学の就任講義で述べられたもので、ケインズが紹介している (Keynes, John Maynard. 1924. “Alfred Marshall, 1842–1924.” *The Economic Journal* 34 (135) : 311–372)。あらためて読み返してみると、格調高く含蓄の深い表現である。

“It will be my most cherished ambition, my highest endeavour, to do what with my poor ability and my limited strength I may, to increase the numbers of those whom Cambridge, the great mother of strong men, sends out into the world with cool heads but warm hearts, willing to give some at least of their best powers to grappling with the social suffering around them ; resolved not to rest content till they have done what in them lies to discover how far it is possible to open up to all the material means of a refined and noble life.”

宇都先生のお仕事は、まさにマーシャルの思想を体現するものといえる。宇都先生の薫陶を受けた卒業生は、福祉の実務や研究の世界で多数活躍している。

最近、久しぶりに映画『ブルース・ブラザーズ』を観た。シカゴの孤児院（とあえてここでは書く）の税金を支払うために、二人の兄弟がバンドを結成して金策に奔走する物語である。バンド仲間を誘おうとして、兄弟は高級レストランに突入したり、ショッピング・モールで警察とカーチェイスを繰り広げたり、さまざまな騒動を巻き起こす。ダン・エイクロイド演じる兄弟の一人、エルウッドは何が起きても涼しい顔で、「神様のお使いな

んでね」“We are on a mission from God”と言ってシレっとしている。宇都先生は長年児童養護施設の研究に取り組んでこられた。先生の研究テーマもまさしく a mission from God といえるだろう。困難な、しかしその社会的な意義ははかりしれないテーマに、宇都先生は取り組んでこられた。スタッフとしては、先生のご退職にさいし寂寥の念に堪えないが、その情熱を受け継いでいきたいと思う。

宇都先生が指導された江連崇氏の博士論文要旨と審査報告をはじめ、今巻で人間科学部社会学科の日頃の研究成果を伝えることができることは、編集子にとって喜びである。また、スタッフ、学生の論文に加えて、兼任講師の羅一等先生および室井康成先生より玉稿をお寄せいただいた。今後も、兼任講師の先生方には、『人間科学論集』を发表の場として活用していただければ幸いである。『人間科学論集』は専修大学人間科学部の雑誌であるが、その投稿資格者は投稿・執筆規定に定めるとおり、兼任講師も含め「広め」に設定されている。今後もさまざまな著者、読者の参加によって、内容を充実させていくことは重要な目標である。

今巻の編集は、専修大学出版局のAさんにご担当いただいた。コピーエディティングやレイアウトなどの細かな作業をAさんにはお引き受けいただいた。記してお礼申し上げたい。

入稿間際になって、訃報に接した。4号館の研究室受付をされていたSさんが2018年1月下旬、急逝された。4号館には、社会学のスタッフの多くが研究室を置いている。出勤簿の管理や他部署との連絡など、Sさんにはたいへんお世話になった。気さくで明るく、親切な方だった。受付に寄ったときに、Sさんとなにげない世間話することがスタッフには息抜きになっていた。大学の常で、学部には輝かしい歴史があり、ヒーローがいるのだが、受付のような「シャドーワーク」にはスポットライトがあてられることはほとんどない。しかし、じつは社会学科はSさん抜きでは立ち行かない、それほどだいたい仕事をしていただいていた。今でも急な旅立ちが信じられず、受付に行くときSさんを探してしまう。この場を借りてお礼申し上げるとともに心よりご冥福を祈りたい。

(社会学篇編集委員 秋吉美都)